

トーマス・ヘップバーン  
『オークニー諸島の貧困』(1760年) (2)

Thomas Hepburn, *A Letter to a Gentleman from his Friend in Orkney, containing the True Causes of the Poverty of that Country* (1760)

古家弘幸・訳

Thomas Hepburn is an eighteenth-century Presbyterian minister whose tract translated here presents a fine example of the work in political economy in the Scottish Enlightenment. In it Hepburn acutely analyses the main causes of the poverty of the Orkney Islands, a remote area of Scotland where he served for nearly two decades. His main purpose was to defend the Earl of Morton, a Scottish nobleman who had been involved in a bitterly-fought epic court case called the 'Pundlar Process', about tyranny and oppression with which he had been charged by his own vassals. Hepburn in the end remits the Earl of Morton, citing many reasons why the Islands were suffering from poverty, other than the alleged tyranny and oppression. Hepburn is now an overlooked and almost forgotten figure who nonetheless shows how political economy characteristically emerged in the Scottish Enlightenment out of eighteenth-century British political culture and legal contexts.

Hiroyuki Furuya

JEL : B12

キーワード : オークニー諸島、貧困、モートン伯爵、圧制、派閥抗争

Key words : The Orkney Islands, Poverty, The Earl of Morton, Oppression, Faction

(承前)

オークニー本島には、カークウォール<sup>1)</sup>とストロームネスの住民を除いて、1 万人が住んでいる。本島全体の年間の地代は、実質で英貨 3,000 ポンドに達しない。その生産物で 1 万人の怠惰な人たちが何不自由なく扶養され、衣服を与えられるとするなら、申し分のない島であり、安価な地代であるといえる。

オークニー諸島の住民の数は、少なくとも 5 万 2 千人と認められている。

オークニー諸島全体の所領と上位土地所有権の地代は、バター、オイル、オート麦、麦芽、大麦、現金など、普通に換算して、実質で英貨 7,000 ポンドを超えない。

バターとオイルは、放牧地や漁業の報酬として支払われるのであるが、この地代の相当な部分を占める。したがって、耕作地はそれだけ少ないはずである。

地代の 3 分の 1 近くは貴族たちに支払われるので、これら閣下たちの意向と利害に応じて、現物のまま国から持ち出される。また教区地主たちの多くも地代を国から持ち出すとすれば、当地の住民たちの生計の財源は、極度に減少してしまうであろう。そしてそれが実情であることは、誰もが知っている。

小作農と庶民の生存と生計が、彼ら自身の手で日々、海から捕り出せるものに大いに依存しているような国では、農業も漁業も成功できず、一方が必然的に他方の障害となってしまうであろう。

これらすべての事情の下では、もし 5 万 2 千人の心身がいかに協調しているかについて驚いたりしない限り、オークニー諸島の貧困について説明するのに、少なくとも当惑することはないであろう。

しかしたとえモートンが借地農に対して全オークニー諸島で最良の雇用主 [地主] であることを認めるとしても、そしてまたそれが否定できないとしても、彼が自分の家臣たちを過酷に虐げており、それが今度は彼らをして彼らの借地農たちを虐げることを余儀なくさせているのではないかと、あなたは言うかも知れないことを、私は十分に承知している。もしこれが本当なら、この国

1) オークニー諸島の首都。オークニー本島の中心部に位置する。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760年）（2）

の貧困のひとつの大きな原因として挙げられなければならない。これについては、じきに明らかになるであろう。[モートンの]家臣たちのうちの何人かは訴訟を起こしており、今現在は控訴裁判所<sup>2)</sup>において未決なのであるが、モートンに対する彼らの訴えでは、閣下と彼の所領の前所有者たちは永代租借地に対する毎年の地代支払いを決める衡量単位を、原初の基準から5分の3以上も次第に増やしてきたと推定されている。この訴訟に裁定が下るまでは、圧制のうわさは概してモートンに向けられるであろう。

私は法律家ではないし、できることはといえば、この訴訟の理非曲直について、良識を働かせて、また私自身の観察において現れてきた事実と詳細によって、そして国全体の一般的な認知と意見から、判断を下すことくらいのものである。私には、公衆の会話で口にされたのを私が聞いたところの世間一般の議論のうちのいくつかをあなたに提示する以外には、何もできないし、それもあまりうまくは説明できないかも知れない。両陣営の法律家たちの主張を聞く機会があるあなたの方が、この訴訟の理非曲直について判断を下すのに、より資格があるであろう。

原告側の主要な論拠は、それに彼らの申し立ての全体が依拠しているわけであるが、ノルウェーの衡量単位とオークニー諸島のそれとが異なっていることに基づいている。ノルウェーが宗主国であったことから、後者は前者を模倣したわけである。オークニー諸島の衡量単位は、ノルウェー語の名称を残しているのであるが、しかしながらノルウェーで同一の用語で表示される衡量単位よりも明白に大きいのである。したがってその分だけ、オークニー諸島の衡量単位は、時に応じて暴君や圧制者たちによって、彼らの家臣たちに、また国全体に大きな損害を与えつつ、増大されてきたのだというわけである。

これに対しては、次のように回答が与えられてきた。すなわちオークニー諸島がデンマークとノルウェーの王領から譲渡されてすでに2世紀が経つのであり、その間に多くの世代と彼らの仕事が忘却の淵に沈められ、すべての人為的な風習や慣習は大いに変遷してきたのだということである。現在のあらゆる

2) エディンバラにある控訴裁判所 (the Court of Session) は、スコットランドの最高民事裁判所であるが、ロンドンの上院議会議会にさらに上告することも可能である。

る地域の基準衡量単位が、300 年前のものによって規定されるべきであるなどと主張することは、極めて異様なはずである。またある国の基準衡量単位を別の国のそれによって規定しようとする企てることも、たとえその国が偶然にも他方の国の植民地だとしても、それに劣らず馬鹿げている。アメリカにおけるイギリス帝国では、植民地がその宗主国からポンドやシリング、ペンスといった用語を模倣してきたわけであるが、しかしもし誰であれ今現在、これらの用語が植民地でも宗主国でも同じ金額のおカネを表示するのだと、頭の中で思い込んでいるとしたら、言語道断な誤解をしていることになるであろう。今から 300 年後の歴史家が本を書いて、そのような意見を主張し証明しようとするなら、それに劣らず誤解をしていることになるであろう。しかしながら時間の長さが引き起こす不明瞭さと、用語の同一性が、多くの利害関係者たちに、彼の意見をまことしやかなものに見せるかも知れないので、彼は多くの改宗者を味方に引き入れるであろう。スコットランドはポンドやシリング、ペンスといった用語をイングランドから模倣したが、これらの用語で表示される金額は、これら二つの国では非常に異なるのである。スコットランド南部の諸州では、トゥモロコシの様々な測定単位は、たとえすべて同じ用語で、ボール、フィルロット、ペック、リップ、フォルペット<sup>3)</sup>などと表示されているとしても、リンリスゴー<sup>4)</sup>で使われている測定単位と異なるだけでなく、それら諸州の間でもそれぞれお互いに異なっているのである。

物の分かった歴史家であれば誰でも、人類のあらゆる移住の歴史において、次のような考察の持つ真実性に気付くであろう。すなわち「植民地が宗主国から模倣するように、他の国民から言語や用語を模倣する全ての国は、彼ら自身の状況や事情に合わせて、それらの用語を適応させる自由を常に行使する」ということであり、このような場合の作用の一般法則は、「それらの用語が特定の物資を元の場合より多く表示するか、より少なく表示するかは、それらの用

3) いずれもかつてスコットランドで使われていた乾量（穀粒など乾燥したものの計量）の単位。約 145 リットルが 1 ボールで、1 ボールは 4 フィルロット、1 フィルロットは 4 ペック、1 ペックは 4 リッピーで 4 フォルペットである。

4) エディンバラの西で、スコットランド王宮跡がある町。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760年）（2）

語が借用されてきた元の国よりも、[その国で] その物資がより多く存在するか、より少なく存在するかに左右される」ということである。さてノルウェーでは、トウモロコシがほとんど、あるいは全く育たない。オークニー諸島ではそれが主要産物であり、ほんの少量の使用に際しても、それが相当な量に上るはずであるから、穀物の衡量単位は大きくなければならないのである。

エディンバラでは小売業者たちによく知られていることであるが、彼らがバターやチーズを、それらの産品でよく知られているいくつかの州から買い付けていた当時、彼らが買うときに使った衡量単位と、小売りするときに使った衡量単位との差から、かなりの利益が生まれたものであった。

原告側の次の論拠は、衡量単位を引き上げることによる圧制のいくつかの事例から成っている。これらの事例は、衡量単位の一般的な増加を立証するには不十分であると、私は言われたことがある。それどころか、申し立てられているこれらの事例は、真実性においても事実においても何らの根拠もないと、私は聞いたことがある。

彼らが事実と主張するところでは、オークニー伯爵パトリック・ステュアートは、リスプンドという衡量単位<sup>5)</sup>を15ポンドから18ポンドへ増加させたということである。にもかかわらず、オークニー諸島で彼が犯した反逆罪と圧制のいくつかの行為で訴追され、死刑に処せられたとき<sup>6)</sup>、彼に対する起訴状では、彼がかつて衡量単位を増加させようと企てたなどということには、全く触れられていないのである。この極悪な圧制者に対する起訴状は、12か13の箇条から成っていたが、もし衡量単位の増加が本当であったとすれば、これらの箇条のうちのどれも、これよりも多くの不正で満ちてはいなかったということになるであろう。

彼の死から100年以上経ち、この訴訟が始まる30年前にも、何人ものオークニー諸島の地主たちが、モートン一族に成功裡に抵抗した。しかし彼ら全て

5) デンマークからもたらされた重量単位で、1リスプンドは7.936キログラムである。

6) オークニー伯爵パトリック・ステュアート (Patrick Stewart, the 2nd Earl of Orkney and Lord of Shetland, 1569-1614) は、財政運営の失敗と現地での残虐行為で、シェトランド諸島の行政長官 (Sheriff of Shetland) だったローレンス・ブルースなどに対立し、反逆罪の宣告を受けて処刑された。

の抵抗がたけなわであったときでも、衡量単位が増加させられてきたなどという考えは、彼らの頭には浮かばなかったのである。しかし彼らとて、少なくとも現在の地主たちに負けず劣らず賢かったわけであり、もしそのような増加がなされていれば、彼らの 30 年後に登場する地主たちよりも徹底してそれを知り、また感知したはずである。

この訴訟に関して、当地の思慮ある全ての人の考察に入ってくる二つの状況があるのだが、それらに対して原告側が答えられたためしはない。

一つ目は、職人たちや労働者たちの一年間の、あるいは一か月の、または一週間の扶養に割り当てられるオート麦の量は、100 年前から変わっておらず、また同じ衡量単位の名称で表示されているということである。もし原告側の主張する基準衡量単位、つまり 5 分の 3 を標準として、この割り当て量を減らしたとすれば、一人の労働者を扶養するには充分でなく、まして彼の妻と子供を扶養するには、今では全く足りないのである。

二つ目の状況は、長老教会牧師の聖職給の情勢であり、これはこの訴訟が開始された時点では、平均でも最低限以下、すなわちスコットランド通貨で 800 マーク以下であった。これらの聖職給は、記憶にないほど大昔から、現在と同じ方法で支払うべきものとされてきた。すなわち大量の麦芽や大麦、バターによってである。長老教会の牧師たちは、今ではごく僅かな資産しか持ち合わせがないのである。しかしもし彼らの聖職給が、原告側が申し立てた基準で改変された衡量単位で支払われるべきであるとすれば、牧師たちは乞食のような有様に陥っていることであろう。彼らは妻たちや子供たちを扶養できる状態からは程遠くなってしまい、彼ら自身に食料や飲料、人並みの衣服を与えることもできなくなってしまうであろう。

原告側が強く主張するもうひとつの論拠は、彼らが支払うべき永代租借地に対する毎年の地代は、スコットランドの他の場所で国王の家臣たちのほとんどが支払っているそれよりも、はるかに高いということである。その事実は、真実と認められる。

しかしながら他方では、これら諸島の住民たちは、軍事上の熟練と能力に優れていたためしががないということも主張される。たとえ彼らが軍事的な気質を

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760年）（2）

持っていたとしても、彼らがスコットランドやデンマークから遠く離れていて、分離されていたことは、それらの王国にとって、それを無用なものたらしめたことであろう。せいぜい身内の喧嘩騒ぎの元となっただけのものである。これが実情であったので、これら諸島の上位土地所有者たちや収税吏たちは、彼らの地代を軍役による土地保有権や軍務と引き換えに減らしたり、一部分をそれらと交換するよりも、現物や現金で取り立てて、[地代そのものを]増やした方がより好都合であると常に悟ってきたのである。確かにスコットランドやデンマークの命運は、そのような軍務が得られるよりも前に、ことによるとそれが要求されるよりも前に決せられてきたし、今後も常にそうであろう。

私はモートン自身の借地農たちに対する彼の行為をめぐって、いくつかの詳細をすでに取り上げて評してきた。そして私は、圧制の意図を判断するのに、それより相応しい物差しを知らない。あなたはまた、彼の家臣たちに対する彼自身の行動の性格が抑圧的であるかどうかを、住民や平民、家臣たち自身、そして牧師たちの大多数の意見によっても判断することができるであろう。もっともこのような判断の仕方は不正確で、誤りやすいのであるが、しかし無価値というわけでもなく、係争の一方の側の主張しかおそらくは聞いたことがないような第三者の心に訴えることに失敗しないものである。

平民の声というものが、最初に聞かれるべきである。彼らは自分たちの感情と経験から語っているので、この事件では最も重要なのである。

彼らは皆、モートンの借地農たちは国中で最も幸福であり、彼は最良の雇用主 [地主] であり、この国に生じうる最大の恵みは、彼がこの諸島全体の [単なる] 上位土地所有者というだけでなく領主でもあることであり、閣下が単独の領主であるバーセイの所領の借地農たちは、オークニー諸島で最も幸福であり、土地自由保有権者の多くと較べてすら望ましい境遇にあることを<sup>7)</sup>、誰に対しても認めるであろう。彼らの揺るぎない意見は、現在は未決であるこの訴訟において、モートンは対抗勢力の権力と財力にもかかわらず勝訴するであろうということである。彼らは皆、彼が成功するよう心から願っている。そして

7) 封建制以前からの生き残りである土地自由保有権者たち (udalmen) は、封建制の下での永代租借地代の支払い義務を免れているとはいえ、地主としては弱小である。

この彼らの意見が、彼らの善悪の感覚に基づくものなのか、それとも単に彼ら自身の利害に関係しているだけなのかということは、同じことである。

オークニー諸島のすべての地主階級と教区地主たちにとって、彼らが支払うべき永代租借地代を軽減してもらうことは、身分の上下の別なく大いに喜ばしいであろうことは、誰も疑わないであろう。多くの場合、それは彼らの所領の地代総額の半分に、場合によってはそれ以上に達するのである。しかし大勢いるオークニー諸島とシェトランド諸島の教区地主たちのうち、オークニー諸島のたった 16 人だけしか、最もしつこい教唆がなされたにもかかわらず、モートンに対する告訴にギャロウェイと共に名前を貸すことを適切であり、あるいは正当であるとは考えなかったのである。ギャロウェイはオークニー諸島のある地主をシェトランド諸島に送り込み、当地の地主階級に影響力を及ぼそうとして骨を折ったのであるが、しかしひとりの教区地主すら、閣下からの嘆願の手紙と庇護の約束を光栄に感じつつも、協力するように説き伏せられることはなかったのである。

もし私が、その 16 人のオークニー諸島の地主たちのうち、この訴訟でかなり凶暴な 9 人は、年間に稼ぐ地代を合わせても英貨 200 ポンドに匹敵しないと言え、あなたは微笑するかもしれない。その 9 人のうち 5 人は、合わせても年間で英貨 50 ポンドに達しない。ということは、最も富裕な階層の教区地主たちの大多数は、モートンを圧制者とは見なしておらず、彼に対する訴訟も根拠が十分であるとは考えていないと推定されるのではないだろうか？ その大多数の教区地主たちの中には、対抗勢力と同じくらい思慮深く、彼ら自身の利害に関わる事柄について熟慮し、それを追及することに熱心な地主たちを見つけることもできるのである。彼らが閣下 [モートン] に 5 分の 3 にものぼる上位土地所有者に対する永代租借地代を従順にも献上していると仮定されるべきではないのである。

オークニー諸島の牧師たちは、スコットランド教会の他の牧師たちと同様に、自由への崇敬で名高い。彼らは平民と教区地主たちとの間に置かれているため、圧制の実行者と受難者について信頼の置ける審判者であるに違いない。私は彼らの 4 分の 3 と面識があり、彼らのことを、思慮分別があり高潔であり、



古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760年）（2）

大いなる慈愛を持った人たちだと考えている。私は彼らとこれらの問題についてしばしば語り合ってきたのである。彼らは全員一致してモートンを圧制の告発から無罪放免する。しかし彼らはそれら教区地主たちを免責することは断じてない。彼ら自身の多くが、彼らの惨めな同胞たち〔平民〕の正義と権利を単に擁護しただけで、それら教区地主たちによって苦しめられ抑圧されてきたのである。この訴訟に直接に関与している牧師が一人だけいる。しかし私は、この状況を彼の分別や〔ギャロウェイなど対抗勢力への〕感謝の念への証拠として誰かが語るのを聞いたことがない。彼の同僚たちは彼のことを善人だと思っており、彼の行動を彼特有の事情のせいと見なして大目に見ているのである。

さて、もしモートンがこのように平民の一般的な声によって、地主階級の少なくとも10分の9によって、また牧師たちによって無罪放免され、さらには今のところ未決である彼に対する訴訟が根拠のないものとの評決が下されるとするならば（そして私は、近々いずれにしても結審が付けられると聞いているのであるが）、圧制によって引き起こされてきたオークニー諸島の貧困は、それら地主たちと教区地主たちに責任が帰せられなければならないことになる。そして彼らは、その責任に反駁することが大変難しいことを思い知るであろう。

私はあなたからの最近の2通の手紙によって、基準衡量単位の増加とモートン一族によるこの国の圧制という噂話があなたの耳に届いていることがとてもよく分かる。しかしたとえこの噂話が大いなる術策と精励でもって喧伝されてきたとしても、また遠く離れた場所で大きな影響力を獲得してきたとしても、真実がよりよく知られているここオークニー諸島では、賢明で思慮分別のある人たちはほとんど誰もそれを信じていないと、私はあなたに確約することができる。

私はかつて、オークニー諸島で最も思慮分別のある人たちのうちの一人とこの問題について話しているとき、モートンを圧制のかどで提訴した原告側に驚きを表したことを憶えている。彼らのうちの幾人かによって、彼ら自身の借地農たちに対して為されている苛酷さや残酷な仕業のことを考えたからである。「先手を打って罵りの言葉を使用した点で、彼らは確かに抜け目がない」と彼は答えて言った、「その告訴が彼ら自身に、より多くの真実性と妥当性を伴っ

てそのまま返ってくることを、彼らはよく知っているのだから。その上」と彼は付け加えて言った、「訴訟などというものは常に、勤勉さや質素な生活や態度よりも自分の財産以上にカネのかかる生活に慣らされてきた怠惰な人間どもに、より相応しいものなのであろう。」

## IX 派閥抗争

このことは私に、オークニー諸島における派閥や党派の増大と拮がり、その状態に関して、あなたに何か言いたい気に自然とさせるものである。これらはこの国の富に対して悪影響を及ぼし続けており、人々の精神に対してはさらに悪い影響を及ぼしているのである。

オークニー諸島の現在の大多数の地主たちの祖先は、平凡な身分の人たちであり、国王の所領の永代租借地権者であった。彼らの土地保有条件によって、彼らは永代租借地代という方法で、地代の全額を支払う義務を負うようになっていった。彼らは賢明にも、上位土地所有者〔国王〕に支払うべき地代を上回って土地が産出するように、彼ら自身の努力と勤勉によって彼らもたらすもの以外には、彼ら自身の何をも当てにはしなかった。彼らは地味で質素な、分別のある田舎の人たちで、儉約で勤勉な労働者たちであり、茶やコーヒー、ラム酒、絹織物やビロードといったものとは無縁であった。彼ら自身の土地と周囲の海が、彼らの衣服、食料、飲料を供給した。彼らの借地農たちは、彼らの友人であり仲間であった。借地農は誰もが、年に少なくとも一回、クリスマス休暇の時期に彼の地主をご馳走でもてなした。これらの饗宴は、田舎の人たちからボーマックと呼ばれ、優良な所領を持っていたある亡くなった地主が、これらのボーマックを借地農が彼の雇用主〔地主〕に対して催す義務を負うものと見なし、自分の所領の中のすべての家のボーマックを、4 セッティンの麦芽に換算し、それを総地代のうちで固定した定額の毎年の地代として請求した。というわけで現在ではこれらの地主たちのほとんどは、借地農たちとボーマックで席を共にすることは侮辱であると感じるのであろう。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760年）（2）

今の世代の多くの地主たちは、彼らの祖先たちの素朴で質素な生活を、奢侈や浪費と引き換えに放棄してしまった。彼らは耕作など、勤勉を要するあらゆる種類の仕事に耐えられるようには育てられていない。彼らは全く誰をも勤勉や労働で養うことができない。彼らは賢明で儉約な彼らの祖先たちの人生行路に戻ることで奢侈を払いのけようという気もない。衡量単位の増加と圧制に対する抗議の叫びが一旦上げられれば、怠惰で虚栄心が強く遊蕩的な人たちの間で大きな影響力と信用を得ることは、もちろん不思議ではない。最も多年に渡って最良の所領を保持してきた地主たちは、まだこの種の告訴を全く行っていないし、圧制に対する叫びを上げたり陰口をたたいたりしたことすら、おそらくないであろう。ただ例外は、以下に述べる事件であり、現在の問題を説明するのに大いに役立つので、私がそれについて多少はうるさくなってしまうことをあなたは容赦してくれるものと考えてる。

1733年か1734年に、バーレイ島のジェイムズ・ステュアート卿<sup>8)</sup>、当時モートンの土地差配人を務めていた人物<sup>9)</sup>と折悪しく口論となった。この人物は、彼〔ジェイムズ・ステュアート卿〕の利害が役に立つ限りは、極めて残虐な殺人、というかむしろ暗殺の結果求刑された絞首刑からその勲爵士〔ジェイムズ・ステュアート卿〕を免れさせる上で、時に大いに助けとなってきた。

この絞首刑という結末は、バーレイ諸島と南ラナルドシャーにおいて彼が犯した最もひどい種類の圧制、虐待、残虐行為に対して、当然に値するものであった。もし彼が公判を前にしてサザークの拘置所で死亡しなければ、彼は最後には反乱罪で絞首刑に処せられていたであろう。

ほぼ同時期に、同じ土地差配人の下で、年間300マークで暮らしていたジェ

8) ここも原文では頭文字の J と S だけで、残りは伏字になっているが、本訳文では「ジェイムズ・ステュアート」と明示する。ここで問題のジェイムズ・ステュアート (James Steuart, the 3rd Baronet of Burray, 1694-1746) は、モートンのようなスコットランド本土の貴族がオークニー諸島の上位土地所有者として君臨していることに不満を抱いていた当地の地主たちを説得して、永代租借地代の支払いを停止させ、スコットランド法制史上でも最も長期に及んだ激しい訴訟の一つとなった「パンドラー訴訟」を原告側で率いた。ロンドンのサザークにある拘置所で獄死した (Fereday [1980], 36)。『経済の原理』(1767年)の著者、ジェイムズ・ステュアート (James Steuart, the 7th Baronet of Coltness, 1713-80) とは別人である。

9) 1725年からモートンの所領の土地差配人を務めていたジョン・ヘイ (Fereday [1980], 37)。

イムズ・モーワットという人物が、彼の雇用主 [ジェイムズ・ステュアート卿] と折悪しく口論することとなり、彼の所領から逃げ出した<sup>10)</sup>。

土地差配人に復讐しようとして、この勲爵士 [ジェイムズ・ステュアート卿] と彼の従者である地主は、彼に対する苦情をモートン [所領の上位土地所有者] に申し入れた。モートンはこの苦情の妥当性を調べることに、もし実際に彼らが損害を被っていたことが明らかになった場合のために、苦情を申し立てた人たちに補償を与えるためだけに、オークニー諸島まではるばるやって来た。その苦情は事実無根であることがわかり、彼らは公に懲戒された。

その勲爵士 [ジェイムズ・ステュアート卿] と彼のごろつきは、この公然たる侮辱に耐えられなくなって、ただ閣下に対する復讐心のみを表した。この何年か後のジェイムズ・ステュアート卿によるモートンに対する人身襲撃と、その結果として始まった訴訟手続きについて、あなたは聞いたことがあるに違いない<sup>11)</sup>。

しかし彼らが公に懲戒されて以来、彼らはこの貴族 [モートン] と彼の前任者たちを、国の基準衡量単位を桁外れの高さにまで折に触れて増加させてきた暴君、圧制者だと申し立てるなど、より確実な復讐を企てることに時間と精力を一心に費やしてきた。このミーソン氏 [ジェイムズ・ステュアート卿の従者である地主] は<sup>12)</sup>、歴史家であり (もしあなたが歴史家という呼称を、古文書と古臭い記録を読むのに時間を費やしている狭量な知識と馬鹿げた妄想の持ち主に割り当てるとすればであるが)、その勲爵士 [ジェイムズ・ステュア

10) ここの原文では頭文字の J と M だけで、残りは伏字になっているが、本訳文では「ジェイムズ・モーワット」と明示する。ここで問題のジェイムズ・モーワット (James Mowat) は、1739 年にフロクタ島にあるジェイムズ・ステュアート卿の所領から移住しようとして、卿本人による人身襲撃と監禁、強奪を含む虐待を受けて妨害された (Fereday [1980], 39-40)。

11) グレアムズホールでのモートン伯爵襲撃に対して、エディンバラの最高刑事裁判所 (the Court of Judiciary) は、ジェイムズ・ステュアート卿に有罪判決を下し、高額の賠償金を課したので、卿はほとんど破産状態に陥った (Fereday [1980], 42-5)。

12) ここの原文では頭文字の M だけで、残りは伏字になっているが、本訳文では「ミーソン」と明示する。ここで問題のミーソン (Meason) は、ジェイムズ・ステュアート卿派のギルドの長 (the Dean of Guild) である (ギルドの長は、オークニー諸島のカークウォールなど、スコットランドの自治都市の同業組合の長で、その都市内の全ての建物に対して管轄権を持つ)。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760年）（2）

ト卿]にとって、衡量単位の増加という新たに提唱された教義を、私がすでに述べた議論や、優柔不断で自分の利害で動かされる人たちを騙すのに同じ程度に適当な他の議論で証拠立てる上で、大いに有益であった。この教義の信念を宣伝するために、多くの術策と苦心がたゆみなく費やされ、それは多くの人たちに熱烈に信奉された。なぜならそれは、彼らの利害に強く結びついており、勤勉さを持たない虚栄的で怠惰な人たちはそれを、これまで彼らが支払わなければならないならなかった上位土地所有者への永代租借地代の大部分を免れることで彼らの富を増やす手っ取り早い方法と考えたからであった。その結果として、先に言及された16人のオークニー諸島の地主たち、並びにギャロウェイの提訴により、モートンに対して訴訟が起こされたのであった。

もしかしたら、基準衡量単位は増加させられてきたのかも知れない。しかし同時に、この訴訟が始められる基になった原則は、そのような信念に対してほとんど何の根拠も与えないことを、あなたは私とともに認めるであろう。

これらの人たちが、彼らこそ暴政と圧制のくびきの下でうめき苦しんでいる不幸な人たちなのだという信念を、王国中に流布させようと現在まで多年に渡って努力しながら用いてきた多種多様な手段を挙げることは、長たらく退屈で、ほとんど際限がないであろう。彼らの一人ひとりが、俗受けする議論を自由に駆使し、それをあらゆる会話や社交の場に持ち込むことを好んで行うのである。ものを考えない連中は、それにたぶらかされ、自由を愛する者たちでさえ、彼らの苦しみを哀れむ。この議論は、北方ではひどい暴政が行われているという一般的な憶測から、本当のことであると、彼らは無分別にも十分に思い込み易いのである。彼らの喧騒と叫びは、モートンが彼の訴訟理由の理非曲直だけを信頼し、そのような議論を全く無視するだけに、より影響力を得る。このような行動の仕方は、公明正大で誠実であるかも知れないが、とにかくするうちに彼の品性と品行が非常に不当にも中傷され、偽って伝えられるのである。

以下に述べる逸話は、閣下に抵抗するそれら地主たちを駆り立てる並外れた精神について、あなたが判断を下す上で助けとなるであろう。

彼らのうちの4人は、1746年4月に、社会の混乱に乗じて何が何でも利益を得ようとした。彼らは若儲王の長男で、彼の部隊の司令官の一人であったマ

クラウド卿宛の手紙に署名をしたのである<sup>13)</sup>。この手紙で彼らは、殿下（というのも、彼らは若僭王の長男をそのように称したのであるが）にできる限りのあらゆる援助を与えることを確約した。この手紙は、その日付の数日後にマクラウドがサザーランドで捕らえられた時、押収された。その後しばらくして、手紙の署名者である 4 人を逮捕するための令状が発せられた。彼らは逃亡し、彼らの住宅は海兵隊に焼き払われた。彼らの生命と所領は、翌年に可決された免責法によって救済されたが<sup>14)</sup>、世間に復帰するや否や、彼らはモートンによる処置のみによって、また彼らが彼らの国の自由の闘士として抵抗したために、それだけ一層苦しんできたのだということを世間に説き伏せようと努力した。そして彼らは喜んで、彼ら自身をモートンの反逆者とだけ呼んだのであった。しかしもし本当に閣下 [モートン] がその気になったならば、彼に提供される非常に申し分のない理由の数々に基づいて、彼は国王閣下の温情処置を彼らから剥奪していたかも知れない。少なくとも彼は、彼らが国王からの慈悲を受けるに相応しい対象であるかどうか認められるまでは、免責法から彼らを除外することはできたはずである。あなたは、モートンはその当時イギリスに居たのかと、尋ねるでしょうか？ とんでもない、彼らの手紙の日付と、彼らの住宅が焼き払われてからもしばらくの間、閣下はバステュー監獄でフランス国王の嚴重に監禁された捕虜だったのである。これが話の真実であるが、しかし事態に不案内な人たち全てに原告団の党派心の強い者たちから与えられた悪意に満ちた説明からは、大変異なっている。

13) 若僭王は国王ジェームズ 2 世の孫で、イギリスの王位を僭称したチャールズ・エドワード・ステュアート (Charles Edward Stuart, the Young Pretender, 1720-88)。「ボニー・プリンス・チャーリー」の愛称を持ち、ステュアート朝復興を目指してジャコバイトの反乱 (1745-46 年) を起こしたが失敗した。本文にあるマクラウド卿 (John Mackenzie, Lord Macleod, 1727-89) は、若僭王の長男ではなく、キースネスのジャコバイト派の貴族、クロマティ伯爵 (George Mackenzie, the 3rd Earl of Cromarty, 1703-66) の長男である。彼らはウェスター・ロスのマッケンジー氏族を率いてジャコバイトの反乱に深く関与し、反逆罪を宣告されて爵位と所領を剥奪された (Fereday [1980], 59-60)。ジョン・マッケンジーは戦後、イギリスを離れてスウェーデン軍に入り、七年戦争中のボヘミアでの軍事作戦 (1757 年) に参加するなど、30 年に渡って活躍した。1777 年にイギリスに帰国した後は、ハイランド歩兵大隊を集めてインドに遠征し、1784 年には一族の所領の回復も果たした (Frasers [1876])。

14) 免責法は、公務執行中などの違法行為を合法化する法律。

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760年）(2)

以下は、この訴訟における原告側の狡猾で、私が思うに不当なごまかしの（私が耳にした多くの事例のうちの）別の事例である。

1750年にこれらの地主たち、というより彼らの友人で代理人のジェイムズ・マッケンジーは<sup>15)</sup>、『オークニーとシェトランド諸島で一般に拡がる苦悩と圧制』と題する著書をエディンバラで印刷した<sup>16)</sup>。この本はどの書店からも販売のための広告が出されず、公平中立な立場の人たちだけでなく、その本の中で中傷され名誉を毀損されたモートンや彼の土地差配人にすら、一部たりとも入手することはできなかつたのである。およそ50部だけが印刷されたと、私は聞いたことがある。一部分は彼ら自身向けで、残りは、彼らの事件についてもっともらしいけれども一面的な説明でその判断力の機先を制するに値すると彼らが考えた人たち向けであった。もしそのように印刷されて、閣下から極めて注意深く秘密にして隠されたこの本が誹毀文書でなければ、この言葉の最も忌まわしい意味において、何が誹毀文書なのか、私は知らないことを認める。背後から人を刺し殺す刺客でも、それより下劣で卑怯な役割を演じているわけではないのである。そこまでひどい種類の助力と救援を要求する主義主張に、どのような真実性や正当性が想定され得るのか、あなたに判断をお任せする次第である。

モートンに反対する彼らの熱狂と激情は、あらゆる宗教的熱狂や、あなたも読んだことがある歴史上のあらゆる偏狭頑迷な人の激情と同等のものである。その類似性は、人々を改宗させようとするその強い欲望において、大変著しい。そのため私は、この一族〔モートン一族〕の圧制と暴政についての彼らの所説を宣伝することに彼らが成功したのを見ても、大して驚きはしない。しかし私は、所有権の利害のみに関係する訴訟において、そして所有権に関する問題について審理し裁定を下すことをその職分とする法廷において提示された証拠と事実に基づかなければならない訴訟において、この俗受けを狙った騒ぎ立てが

15) ここの原文では頭文字の J と M だけで、残りは伏字になっているが、本訳文では「ジェイムズ・マッケンジー」と明示する。「パンドラー訴訟」の原告側の弁護士である。

16) MacKenzie, James (1836) [1750], *The General Grievances and Oppression of the Isles of Orkney and Shetland*, Edinburgh.

どのような影響を与え得るのかを推測することは容易ではないと考える。

彼らの熱狂の炎を燃え上がらせ続ける上で、広く行き渡り強くこり固められた次のような見解ほど、大きく寄与してきたものは他にない。すなわち彼らの祖先たちは、昔は大きな富を所有し、並外れた権利と特典を享受し、それらも他の恩恵も全て、今では圧制によって剥奪されてしまったのだという見解である。彼らの一人はある時、ブキャナンが彼らを王族や貴族の称号で呼んだ時代以来の彼らの境遇の嘆かわしい変化について、声を大にして主張した。

そのスコットランド人の歴史家 [ブキャナン] によるこの言い回しに関しては、大いに強調されてきた<sup>17)</sup>。疑いもなく、もしこの人物<sup>18)</sup>の学校時代の先生が、これを「オークニー諸島の王族や貴族」などと翻訳するように彼を教えていたとすれば、彼は彼自身と彼の先生の鈍感さのせいで大いに苦しんできたわけであり、ラテン語など一語たりとも教えられなかったほうがまだましだったであろう。しかしもし先生が、その歴史家 [ブキャナン] によるこの言い回しは、平民や庶民と対比して単に地主を意味するだけだと彼に教えていたとすれば、彼はブキャナンの言い回しについての間違った翻訳で彼の生徒をこの高くつく訴訟に誤り導いたという責任からどうやら免れるであろうというのが私の意見である。

あの時代の銜学とスコットランドの貴族制は、ブキャナンの書いた歴史書の中のこの言い回しや他の多くの特有の語法を正当化する。[ラテン語の] 王族や貴族のような仰々しい形容語句は、ラテン語で著述するどんな歴史家によっても、過去のオークニー諸島の地主たちに対するのと同程度の妥当性をもって現在のオークニー諸島の地主たちに対しても使われ得るかも知れないし、またインド人の取るに足らない小王や、スコットランド北部 [ハイランド] の氏族の最も卑しい族長を意味するのにも、同じように役立つであろう。私たちの傑

17) Buchanan, George [1733] (1582), *Buchanan's History of Scotland*, London. ジョージ・ブキャナン (1506-82) は、セント・アンドリュース大学とパリ大学に学び、ボルドー大学ではモンテーニュを教えた。コインブラ大学でも教鞭を取り、ラテン語詩人として名声を得た。ブキャナンの歴史書の原書は、ラテン語の *Rerum Scotticarum Historia* (1582) である。第 15 代アメリカ大統領のジェイムズ・ブキャナン (1791-1868) は、彼の子孫である。

18) 上で「境遇の嘆かわしい変化について、声を大にして主張した」とされている人物。



古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760年）（2）

出した歴史家〔ブキャナン〕は、オークニー諸島については、うわさで聞いたこと以外何も知らなかったと認めている。しかし同じくらい何も知らなかったトルフェアスという、これらの諸島が自慢にする歴史家も、それら諸島についての記述をブキャナンから引用しているし<sup>19)</sup>、トルフェアスも私たちの愛国の志士たちから同じくらい賞賛されているが（というのも、愛国の志士というのが、モートンの抵抗者たちが彼ら自身を特徴付けるために選んだ呼称なのであるが）、しかし彼の書き方や彼が述べる事実は、いずれも最大限に見下げ果てた代物であることを私は保証する。

ブキャナンの死からまだそれほど経っていない頃のオークニー諸島の地主たちの境遇がどのようなものであったかについては、オークニー諸島についての記録からの二種類の抜粋によってうかがい知ることができるであろう。私はそれらを、この事項に関してあなたの満足のいくように、この手紙とともにあなたにお送りするつもりである<sup>20)</sup>。当時のオークニー諸島の地主たちは、彼らの境遇、財産、地位が良いとは思っていなかったようである。彼らが言うには、私たちは単につまらない地主であり、農民であり、総地代のうち分散した数区画の土地の地代を支払うだけである。今日でも彼らの後継者たちは同様であり、もし彼らが、彼らにとっては不幸にも、その不満に満ちた勳爵士〔ジェイムズ・ステュアート卿〕と彼の従者で歴史家でもある地主〔ミーソン〕が何ら現実的な根拠もなく彼らをしてかつてそうであったと想像する気にさせたような並外れた権利と特典を与えられた大きな富の所有者としてではなく、依然として彼らの祖先たちと同様に考え振舞っていたならば、彼らにとっては幸福であったであろう。

私はあなたに断言するが、もし私が、派閥抗争こそがオークニー諸島の衰退

19) Torfaeus, Tormodus [1866] (1697), *Ancient History of Orkney, Caithness and the North*, Wick. トルフェアス (Tormod Torfaesson, 1636-1719) は、アイスランド系のデンマーク人歴史家。コペンハーゲン大学に学び、デンマーク国王クリスチャン5世付きの史料編集者として接した古代スカンディナヴィアの史料をもとに、ラテン語で *Orcades Seu Rerum Orcadensium* (1697) を執筆した。英訳の縮約版が、キースネスのリエイの長老教会牧師だったアレキサンダー・ポープ (the Reverend Alexander Pope, 1706-82) によって準備され、死後出版された (1866年)。

20) 原典の補遺。本訳では割愛した。

の主要な原因のうちの一つであると説得されなかったならば、今現在これらの諸島の人々を分断し、扇動している派閥や党派の問題について、こんなに多くは語らなかったであろう。

派閥抗争からもたらされるあらゆる有害な影響を、この遠隔の地域 [オークニー諸島] が最も猛烈に被っている。その激情によって、仲睦まじい社会や楽しい地域、愛情のこもった間柄や生活における親愛といったものが破壊され、かつての時代の平和な実直さが訴訟好きと引き換えに見捨てられてきた。これらの諸島の住民たちは、彼らの国に利益をもたらすことができるどのような計画においても結束することに関して、自分たち自身を全く無力にしてきた。多くの一族が彼らの愚行によって、彼らの至当な後援者であった彼らの目上の愛顧と好意を失ってきた。これらの地主たちは訴訟や論争にうつつを抜かして、彼ら自身の所領の改良を完全に怠ってきた。そして少なからぬ罪悪としては、モートンによって着手されたいくつかの貴重な改良が未完成のまま放置されてきた。そして試みられたかも知れないさらに多くの改良が、衡量単位についてのこの訴訟が未決である限りは、試みられることも十分に遂行され得ることもないままである。したがってどちらにしても訴訟がすっかり終わってしまうことが是非とも望まれる。

以上であなたが私に割り当てた仕事が完成した。

敬具

1757 年 3 月 4 日

(完)

#### 参考文献

##### 1. 原典

- Hepburn, Thomas [1885] (1760), *A Letter to a Gentleman from his Friend in Orkney, containing the True Causes of the Poverty of that Country*, William Brown, Edinburgh.

古家：トーマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』（1760年）（2）

## 2. 一次文献

- Buchanan, George [1733] (1582), *Buchanan's History of Scotland*, printed by J. Bettenham, for D. Midwinter and A. Ward; A. Bettesworth and C. Hitch, and J. Batley; E. Curll; C. Rivington, and J. Wilford, London.
- MacKenzie, James [1836] (1750), *The General Grievances and Oppression of the Isles of Orkney and Shetland*, Second Edition: Laing and Forbes, Edinburgh.
- Moll, Herman [early eighteenth century], *A New and Correct Map of the Whole World*, London.
- Torfaeus, Tormodus [1866] (1697), *Ancient History of Orkney, Caithness and the North*, tr. The Reverend Alexander Pope, Wick.

## 3. 二次文献

- Adams, Ian H. [1976], 'Agrarian Landscape Terms: A Glossary for Historical Geography', Institute of British Geographers, Special Publication No. 9, London.
- Fereday, R. P. [1980], *Orkney Feuds and the '45*, Kirkwall Grammar School, Kirkwall.
- Frasers, Sir W. [1876], *Earls of Cromartie*, Edinburgh.
- Furuya, Hiroyuki [2003], 'The 'private vices, public benefits' controversy: the response of the Scottish Enlightenment to Bernard Mandeville', PhD Thesis, University of Edinburgh.
- 'Pundlar Process', printed legal papers, 333Y, Orkney Library.
- Thomson, William P. L. [1987], *History of Orkney*, The Mercat Press, Edinburgh.